『支那遊記』註解其の一：北京より開封まで／桟雲一片

齋藤匡史
Tadashi, Saito

【解題】

本稿は岡倉天心（一八六三～一九一三）『支那遊記』の註解である。

昭和十年、聖文閣『岡倉天心全集（全三巻）』（岡倉一雄編）が刊行された。その後昭和十三年、孫の岡倉古志郎氏が天心の遺品から二冊のノートを発見、一冊は『支那遊記』、他の一冊は未発表の『東洋の目覚め』で、この二点が昭和十三年七月『理想の再建』として刊行された。このうち『支那遊記』は、生前発表された『支那の美術』の元となったものと見られている。本稿の版本は『理想の再建』に収録された『支那遊記』である。

『支那遊記』は「北京より開封まで」、「桟雲一片」、「江邊人河邊人」、「第二第三の所感」、「開封より（消息）」、「支那客遊中の吟詠」が収録されている。近代日本の知識人の中国観を知るために、大学院の授業でテキストとして『支那遊記』を使用してきたが、百二十数年前の文章は些か難解であり、ここに註解を加えたものが本稿である。

東京美術学校の校長であった天心の中国行は宮内省の命で、明治二十六年七月から十二月にわたって中国大陸を踏破した。中国美術の実地調査が主たる目的で、中国語と写真技術を学生の早崎梗吉に習得させ助手として帯同した（この記録写真は『清朝末期の光景』東京国立博物館　二〇一〇年として刊行されている）。

明治二十七年二月、天心は東邦協会（明治二十四年創立の亜細亜太平洋地域研究団体）において帰朝報告をスライドを交えて講演した。その講演速記が「支那の美術」として同協会報告集に掲載され、『支那遊記』となった。

本稿では、異体字については可能な限り原文に依った。また原文に必要と思われるルビを附した。

【本編】

北京より開封迄

明治二十六年の夏期より冬期に亙（わた）り約五ケ月間、天心が宮内省の命を帶び、支那に漫遊せし折の紀行にして、當時の清国の首都北京より保定、邯鄲（かんたん）を經て開封に至り、そこより今の隴海線（ろうかいせん）を西して洛陽西安を經、桟道を以って名高き蜀道の險を渉り、遂に最終の目的地成都に至りし時の記述なり。原文は半ばは講演筆記なれども、天心が加筆の跡歴然たるものあり。當時の「太陽」に掲載せし桟雲一片と併せて編纂せり。

（編者）※「編者」―岡倉古志郎

今回、旅行の目的は、支那の美術品を探るに在りしが拙生首として以爲く、此目的を達するの要、且つ便宜なる者は、蓋し舊帝京、古都城の墟迹に就きて以て、其の遺跡を探尋するに如くは莫きならむと。』又以為らく長髪賊亂[一]の被及せざりし四川省地方に到らば、蓋し美術品に遭遇すること得べきならむと。』故に先づ長安及び成都府を目的として、支那内地に旅行したり。（日本より支那北京に往く道程は既に諸君の熟悉せる所なるを以て今敢て茲に贅陳せず）[二]

【註】

[一] 洪秀全、太平天国の乱（一八五一～一八六四）。

[二] 一九八七年（明治十一）、旅券法が制定されるも明治後期まで、日中間の往来に多くは旅券不携帯であった。但し、中国国内の外国人の旅行等には、清国外務部の「護証」と呼ばれる通行証が必要であった。一九一七年（大正六）には、日中間に相互旅券携帯免除の策がとられている。日中間には一八六九年に米国太平洋汽船が、神戸・長崎―上海航路を開設、一八七五年に三菱汽船が、横浜―上海間（月二便）を開設、一八八六年（明治十九）、日本郵船が神戸―天津航路を開設、天心は天津航路を利用したと思われる。

抑も北京より長安、卽ち今の西安府に赴くの道路は、左右兩線あり、其右なる者を山西路と云ひ、其左なる者を河南路と云ふ、此兩路共に美術品に富めるものなるが、就中、河南路は卽ち古洛陽の舊都を經由する者なるを以て、乃ち途を河南に取り、陝西省を横貫して、四川に赴き、成都府に入り、而して其歸途、錦江を下り、叙州に出て、大江の流れに從て、上海に達し、是れより皇國に歸朝せり、其往復途上の風景事物、或は以て諸君の聽感を慰むるに足りる者無き非るべく、故に其概略を左に話せむ。

北京を出でて、西の方長安を向ふ者は、先つ廣寧門[一]を出つ、乃ち天寧寺古塔[二]を望み、白雲觀[三]を過ぎ蘆溝橋[四]を渡る、涿州[五]に至れは、則燕京の風塵既に遠ざかり、四顧始めて支那内地の風趣を具へ、此身は恍として、第十九世紀の外に在り、古亞細亞州の客と爲れり、是より到る處、滿眼平原、一望千里大行の山脈遙かに行人を送り來る、翠黛天に際し、茫模として遠く低るるを見るのみ。時方さに八月、四面陸田、蜀黍と高粱と共に暢茂して人より高し、行人は朝に高粱を出て、夕に高粱に宿す、連日の行程、唯是一様光景にして毫も他の變化無し。為に人をして倦憊せしむ。加ふるに、其道泥濘、雨降れば則車輪半は沒す。其困難知るべし。

然れども、如是平凡連日一様光景の道路と雖も、吾人探古の客に在りては、則亦自ら無量の雅趣を感ずる者あり。其故他無し、此間過る所の地は、一水一丘、物として古代の遺跡ならさる者無ければ也、墳墓あらむ乎、則是れ往昔英雄豪傑の骨を埋めし處、荒原あらむ乎、則是れ誰氏の古戰場。蕭々たる晨風吹く處、渡る者は卽ち易水[六]の流れ也、徐家橋畔、楊柳數株、其中に一青石標あり、蒼苔を掃て之を讀めは則是れ劉伶伯倫[七]の墓にてありし、此の如く到る處の風物一として古の字……卽ち古と云へる文字に屬する所の深味を帶はさる者は、殆と之無し。』保定府は古の趙の地、望都縣は、帝堯生誕の地[八]なりと云ふ。（堯の生誕に就きては支那古來諸說あり、孰れが是なるを知らず、今姑く其土人の傳說に依る）

【註】

［一］廣寧門（廣安門）：北京外城五門の一。五門とは、東側から廣渠門、左安門、永定門、右安門、廣寧門。内城には北東から南へ、安定門、東直門、朝陽門、（建国門-民国期）、崇文門、正陽門（前門）、宣武門、（復興門-民国期）、阜城門、西直門、德勝門。皇城には、東便門、承天門（天安門）、西便門があった。

［二］天寧寺古塔：創建は四七一年。創建時は光林寺と称した。その後、一四三五年に天寧寺と改名。古塔は遼代十二世紀の建造、十三層密檐式、高さ五十七．八米。北京に現存する古代建築の中で最古とされる。

［三］白雲觀：北京西便門外にある唐代から続く道観（道教寺院）。

［四］蘆溝橋：北京南西、永定河（蘆溝河）にかかる石橋、金代に建造され、全長二百六十六・五米、十一のアーチを持つ。欄干に五百一基の獅子彫像がある。清朝乾隆帝の筆とされる「盧溝曉月」の石碑あり。一九三七年日中戦争の発端となった地。

［五］涿州（たくしゅう）：河北省保定市北部の県級市、秦代に涿県が置かれた。

［六］易水（えきすい）：「風蕭蕭兮易水寒　壯士一去兮不復還」荊軻（『史記』）、解：「風蕭々として易水寒し。壯士ひとたび去って復た還らず」、『易水送別』駱賓王、「此地別燕丹、壯士髪衝冠、昔時人已沒、今日水猶寒。」解：「此の地　燕丹に別る　壯士　髪　冠を衝く　昔時　人已に沒し　今日　水猶寒し」。戦国時代の末、燕の太子丹は、燕の隣国趙を滅した秦王政を恨み刺客荊軻を送る。此の地で往時燕の太子と別れる時、壯士荊軻の髪は慷慨のあまり、冠を衝き上げんばかりだった。その時代の人々はもはや跡形も無いが、今日尚易水は昔のまま寒々と流れている。

［七］劉伶伯倫：劉伯倫、三国（魏呉蜀）時代、竹林の七賢人の一。

［八］望都縣は、帝堯生誕の地：保定市の県、中国神話の皇帝（『史記』「五帝本紀」）。

是より南して、滹沱河［一］に至り、山西路と左右に分岐し、左して邯鄲縣［二］に出つ、邯鄲は趙の古都、古昔壯麗を以て聞へたりしならむも、今は則零落して、一小縣城たるに過ぎず。邯鄲縣城の近傍に黄梁店なる遺跡あり、世俗に傳ふる盧生の所謂黄梁一睡の處［三］と做し、盧生を祭れる一堂宇あり、堂内には、蠟石を以て彫刻せる盧生の臥像を安置す。是より彰德府［四］に出つ、府は、漳河の畔に在り、曹孟德七十二疑塚［五］亦近傍に在りと云ふ、銅雀臺［六］今は荒殘を極め、往昔の影だも無しと云ふ。』湯陰縣［七］に出つ、卽岳飛［八］の故里にして、其祠宇儼然として存立し、祠前には捕縛せられたる罪囚の身體容貌を鑄造したる鐵像數個あり、卽ち秦檜等奸臣の像にして、此祠に賽する者は、必ず、此奸臣の像を鞭撻し、或は罵るを例と為せり。此より衛輝府［九］に達す、府は、直隷省［十］の最南端にして、黄河を隔て、河南省に隣す。府城は、直隷最南界の要鎭なるを以て、頗る觀るべき處あり。

【註】

［一］滹沱河（こだがわ）：山西省北部から河北省中部を流れる河川で、海河水系の支流。河北省の省都石家荘市の重要な水源。

［二］邯鄲縣（かんたんけん）：現在の河北省邯鄲市。戦国時代、趙の首府。

［三］盧生の所謂黄梁一睡の處：「盧生の夢」、六朝『搜神記』、唐『枕中記』、『南柯太守傳』、盧生が出世してから死に至るまでを夢にみる、栄枯盛衰のはかなさを言う。

［四］彰德府：現在の河南省安陽市。京廣鉄路の要衝。

［五］曹孟德七十二疑塚：曹孟德（曹操）の墓に関して、唐代以降七十二箇所の説があったが、二〇〇九年河南省文物局の発掘により安陽西高穴二号墓が曹操の墓とさ

れ、二〇一二年六月、国家文物局により認定された。

［六］銅雀臺：曹操が魏王となった際、西暦二〇一年、漳河畔の鄴（ごう）に造営した宮殿。二一三年には此の南に金虎台を造営、翌年に北に氷井台を造営し、「三台」と称しされた。

［七］湯陰縣：河南省安陽市の県。岳飛の故里。

［八］岳飛：南宋の武将、一一二二年北宋の開封防衛軍に参加し、金軍と闘い功績をあげる。一一四〇年南宋から開封奪還の軍を率いて金軍を押し返すが、南宋の奸臣秦檜に陥れられ殺害される。一一七八年冤罪が晴れ、後に鄂王に追封され、杭州西湖畔に岳王廟が建立され英雄として祭られる。その扁額に「還我山河」と記される。

［九］衛輝府：現河南省新郷市衛輝県。明洪武年間、衛輝府が置かれ、民国初年に府は廃止。

［十］直隷省：清朝の行政区画（北直隷省）。中華民国初期まで保定に省政府が置かれたが、南京遷都により廃止、河北省となった。京師に直接隷属するの意、現在の北京、天津、河北域。

府城より南して、韋縣を經、北城岸より黄河を渡る、黄河も又從來傳聞せる所に似ざる一小流にして濁流潺々の聲［一］を聞くのみ、此官渡を越れは則河南省の省府開封府在り、古昔趙宋八代の都せし處、今尚ほ河南の要鎮たるを以て、頗る繁盛の色あり、美術品古物も亦富めり、西に向て汜水縣［三］に出て虎牢關［四］を越ゆ、關は古昔の要害地にして、今尚ほ頗る嶮阪あり。關西は洛水［五］在り、此を渡れば、古昔の洛陽に出つ、先つ行人の眼に入る者は、佛教が始めて東漢時代に傳來せる所の白馬寺［六］の高塔也、然れども、河南府卽ち古洛陽の遺跡は、滄桑陵谷［七］の變遷既に久しくして、昔日の光景は、絶へて隻影をだも留むる者無し、洵に憐むべき也。』……

黄昏北邙山［八］に登りにし、古人曾て『山上只聞松柏聲』［九］の句あれども、今は則其松柏だも、絶へて痕迹無く、唯荒蕪せる小峰巒を見るあるのみ。』

此より黄河の南岸に沿ふて、西行すれは、陝州［十］に出つ、往昔秦始皇帝が、鑄たる所の十二の金人［十一］中、其二體が殘存して、陝州に在ると云へる說を聞きたる故に、之を尋ねて見たるに、豈料らんや、從來世に傳へたる陝州金人なる者は其名は太だ高しと雖も、其實は、秦皇の遺物に非ずして、而かも、後世五代以下に鑄造せられたる鐵像のみならんとは。（別に桟雲一片と題し、明治廿七年の春雜誌太陽の乞に任せて起稿せし一篇あり、主として入蜀の見聞を記せり。行文稍簡に失すと雖も雞筋棄つる能はず［十二］、仍て此處に錄して前文の後を繼ぐ。）

【註】

［一］濁流潺々の聲：川の流れるさま。

［二］汜水縣（はんすいけん）：光緒三十年（一九〇五年）、直隷州に属す。一九一三年豫東道に属し（豫東道は翌年開封道と改称）、一九四八年、廣武県と合併し成皋県となる。

［三］虎牢關：汜水関ともよばれ、現在の河南省滎陽（けいよう）市汜水鎮にある。洛陽東部の重要な関所。南は嵩山に連なり、北は黄河に面した天然の要害。

［四］洛水：洛河の古名で、黄河の支流。陝西省洛南県に発し、全長四二〇粁。

［五］白馬寺：中国最古の仏教寺院とされ、北魏時代に後漢の明帝が建立した寺と伝えられる。洛陽市の西にある。

［六］滄桑陵谷：丘陵が山谷に変わり、山谷が丘陵に変わる。世の移り変わりの激し

いことを言う。「滄海桑田」と同義。

［七］北邙山（ほくぼうざん）：洛陽の東北にあり、後漢以降、王侯貴族の陵墓が置かれた。「北邙」は転じて墓を意味する。

［八］『山上只聞松柏聲』：（さんじょう ただ しょうはくのおと きこゆるのみ）「邙山」唐 沈佺期「北邙山上列墳塋、萬古千秋對洛城。城中日夕歌鐘起、山上唯聞松柏聲。」解：北邙山上墳塋列つらなり、萬古千秋洛城に對す。城中日夕歌鐘起こるも、山上唯だ聞く松柏の聲。

［九］陝州（せんしゅう）：現在の三門峡市。

［十］秦始皇帝が、鑄たる所の十二の金人（陝州金人）：秦が六国を滅ぼした後、鹵獲した武器で鋳た青銅の立人像。

［十一］雞筋棄つる能はず：「雞筋」ニワトリの肋骨。それほど価値のないものでも捨てるのは惜しいの例え。

棧雲一片

蜀中の山水を記すもの遠くしては入蜀記［一］、近くは井々居士が棧雲峽雨日記［二］あり。周到詳密、以て加ふる蔑し。余が一夕の談たゞ豹の一斑を窺ふべきに過ぎず。題して棧雲一片といふ所以なり。

世人皆な蜀道の至險絶奇天下に冠絶するを說く。李白が蜀道難に『噫吁嚱危乎高哉。蜀道之難難レ於上二青天一。』［三］といへり。一たび蜀中に入るに及びて其然らざるを知る。蓋し河東陝西一帶の平曠に馴れし眼を以て蜀中を觀ば其險絶に驚くべきものありしならん。されど蜀道は事實に於て左程るにあらず。加ふるに歷代の重脩工事あり。殊に乾隆中賈中丞が爆裂藥を以て道路を切開脩繕せるあり［四］。卽ち道路の如き、固より車を通ずべからざれども、輿に乘じて通過するを妨げず。騾馬を交互せしむることも亦容易なり。余を以て之れを觀るに、我國金洞妙義［五］の勝、之を大にすれば、遠く蜀中に駕して上るべし。たゞ局面狹小未だ天下に誇るに足らざるを恨む。冒頭一喝敢て國粹保存というにあらず。

【註】

［一］入蜀記：南宋の陸游が記した紀行。紹興から赴任地四川への旅を綴ったもの、一一七〇年。

［二］棧雲峽雨日記：明治期の外交官、漢学者、竹添進一郎著、一八八〇年（明治十二年）刊。他に『井々居士讀世界之變局詩』（自筆本）あり。

［三］「噫吁嚱（あやふ） 危（あやふ）き乎（かな） 高き哉（かな） 蜀道の難（かた）きは 青天に上るよりも難（かた）し」（李白『蜀道難』）。

［四］乾隆中賈中丞が爆裂藥を以て道路を切開脩繕せるあり：清朝乾隆年間、賈巡撫（中丞は尊称）が命じた道路拡張工事。巡撫は一省の軍政、民政を司る地方官。

［五］金洞妙義：群馬県南西部の連山、妙義山は金洞山、金鶏山、白雲山の三峰をいう。

之より少しく蜀中の游を記すべし。

黄河に沿ふて靈寶縣函谷關［一］に入る。兩岸絶壁峭立し、車は軌を竝（ならぶ）るを得ず。昔日の險岨以て想ふべし。函谷關を過ぎて又潼關［二］を出づ。亦要害の地、今尚ほ關門を三重にして行人の出入を點檢す。潼關を經て萃岳廟［三］に至れば、五岳の一なる華山［四］を望むを得べし。山太だ高からず。從來書籍に記したると大に異なれり。華岳廟［五］の傍には老子曾て青牛を繫ぎしといへる樹木［六］あり。

驪山［七］を徑、渭水灞橋［八］を過ぎて西安府（古の長安）に出づ。今

は陝西省の首府たりと雖も、零落衰殘、また昔日の盛を想見すべからず。府内に慈雲寺〔九〕あり。其大雁塔は裝飾頗る剝落したれど、尚ほ游人の一顧の値すべし。慈雲寺は昔し宴を進士に賜ひし處なり。府外に樂游原〔十〕あり。暮景蕭條、轉た人腸を斷つ。原中に褚遂良の碑〔十一〕あり。かくて渭水を渡り、咸陽縣〔十二〕に出づ。古城零落、濁浪頽壁と相映ぜり。更に馬嵬坡を過ぐ。坡頭に楊貴妃の祠〔十三〕あり。壁龕には長恨歌〔十四〕を始め貴妃に關する詩を刻せり。祠後に貴妃の墓あり。一小土饅頭のみ。傳へて云ふ、七月七日の夜、一道の白氣騰上し、墳上の土為めに白し。之を取りて傳くれば以て黑痣を治すべしと。扶風縣〔十五〕を過ぎ五丈原に出づ。諸葛武侯の祠〔十六〕あり。近く岐山〔十七〕に對し、遠く秦嶺〔十八〕を望み、俯仰低徊、轉た感慨に堪へず。岐山を過ぐれば平原茲に盡き、始めて蜀道に入る。行人此に到れば皆な車を捨て輿に乘る。長安より茲にいたり地勢次第に上れり。大散關〔十九〕より所謂北棧にかゝる。亂石の間を經、一路光景、宛然函山塔之澤宮の下〔二十〕の趣あり。時正に十月、地上既に霜を見る。四山雜木錦を織るに似たり。進みて北棧の最高處鳳嶺に至る。往古神女鳳に乘じて游憩せる古蹟なりと傳ふ。上に距天尺五の額あり。また寺あり、朝陽寺といふ。此間山巒圍繞、我紀州高野山の趣あり。處々雲助の燒栗を食ひながら賭博せるを見る。水滸傳を讀む心地す。峻嶺を上下して馬道驛に至る。蕭何が韓信を追踪せる古跡なり〔二十一〕。馬道驛を去り觀音碥を過ぎて雞頭關〔二十二〕に登る。更に五丁關〔二十三〕に至る。崇嶺峻峰左右に秀峙し、奔湍急瀨上下に亂流す。宋元人が畫山水、宛然眼下に躍出するを覺ゆ。知るべし文人畫は全く是等山水の寫生にして、宋人等の理想に出でにしにあらざるを。廟子台〔二十四〕に至れば留侯の廟〔二十五〕あり。中に道士七八人を認む。

これより南棧に入る。沔縣〔二十六〕に至ればまた武侯の祠あり。建興年間の創建にして、節度嚴武〔二十七〕之を脩築し、後また道光年間〔二十八〕に重脩せるもの。中に石琴一張あり。武侯の遺物なりと傳ふ。道士傍らに在り。錢を投ずれば則ち指を以て摩挲す。琴乃ち鳴る。蓋し下に反響臺を設く。琴の聲を發する、殊に怪むべきなし。龍硐背〔二十九〕を經て朝天驛〔三十〕に至る、一小驛なれど人烟稠密、陝西を出でゝより始めて見る繁華なり。驛中に一大石橋を架す。長さ四十六間、アーチの數十九あり。明時の建築に係り、構造頗る觀るべし。這般の石橋は蜀中に多く之を觀る。支那往古の開化を推想するに足る。馬王廟〔三十一〕に至る。青面四臂劍を舞はすの坐像あり。道士爆竹雞を殺し、血を濺ぎて佛を祭れり。七里坡に至る。始めて日本の如き鬱茂たる樹林を見る。此間高田を烟雨中に望む。宛然米點〔三十二〕の趣あり。元章〔三十三〕の墨畫また寫生に過ぎざるを悟れり。遂に劍州界に達し劍閣〔三十四〕に登る。兩峰の峻嶺天を挿み、中間に一雄關を控ゆ。眞に是れ一夫門に當れば萬卒敢て開く莫きもの〔三十五〕。壁上に蜀道難等の古詩を刻せり。劍門を經て送險亭〔三十六〕に至れば、棧道既に盡き、道路漸く平易となる。石峽關は西秦〔三十七〕第一關にして蜀道に入るの門戸たり。傍に「小心移步」〔三十八〕の碑あり。

【註】

〔一〕靈寶縣函谷關：現在の河南省靈宝市にある古代関所。西は高原、東は渓谷、南は秦嶺に連なり、北は黄河が天然の要害となっている。また老子が『道德經』を著した地、道教文化の発祥地とされる。古代から関中と中原を結ぶ戦略的要衝。

〔二〕潼關：陝西省渭南市潼関県にあり、関中平原東端、長安防衛の要衝。

〔三〕萃岳廟（すいがくびょう）：西岳廟（せいがくびょう）の誤りか。陝西省華陰

市岳鎮にある道教全真派の一大廟宇群。歴代皇帝が西岳華山に祈る聖地とされる。

［四］五岳の一なる華山：五行思想信仰の霊山。五岳とは東岳泰山、南岳衡山、西岳華山、北岳恒山、中岳嵩山を言う。

［五］華岳廟：西岳廟のこと。中国の歴代皇帝が華山の神を祀るため、漢武帝元光初年（紀元前一三四年）に建立された。華山北麓に位置し、廟は陝西省最大の明清風建築群で、「五岳第一廟」と称される。

［六］老子曾て青牛を繋ぎしといへる樹木：伝説。古代周王朝の衰退により、無力さを感じた老子が各地を転々とし、青牛に乗って函谷関にさしかかった時、ただならぬ人物と見た守備隊の将がこれを阻み、留まらせるために難癖をつけ、文を書くよう迫った。老子は一篇の文を差し出し、無事函谷関を通過したという故事。その際、書き記したものが『道徳經』とされる。

［七］驪山：西安郊外臨潼にある。山麓に温泉があり、玄宗皇帝が楊貴妃のために華清宮を築いた。

［八］渭水灞橋：西安市城東の渭水に架かる石橋。一九九四年に灞橋の遺跡が発掘され、隋唐代からの遺物が出土。さらに二〇〇四年、隋代の橋脚十基が発掘された。唐代、西への旅人を河畔の楊柳を手折って送った。王維『送元二使安西』「渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人」

［九］慈雲寺：慈恩寺の誤り。大雁塔は西安市の南、大慈恩寺内にある。唐永徽三年（六五二年）、玄奘三蔵が天竺から持ち帰った仏典仏画を収めるために建立、当初五層であったが歴代の修築により現在の七層となった。高さ六十四米余。

［十］樂游原：長安城城南にある一帯で最も高い丘陵、長安城を一望できた唐代の景勝地。

［十一］褚遂良の碑：杭州钱塘出身。唐代の政治家、書家。吏部尚書まで出世したが、則天武后の即位に反対し左遷される。欧陽洵等と並び初唐四大書家と称せられる。

［十二］咸陽縣：現咸陽市。秦の都。壮大な阿房宮を建設、竣工しないまま秦は滅亡する。『史記』には項羽軍によって焼かれ、三ヶ月にわたって燃えたとの記載あり。

［十三］馬嵬坡　楊貴妃の祠：唐玄宗皇帝が寵愛のあまり、政を顧みず国が混乱し、安禄山の乱によって長安を追われた玄宗は混乱の因となった楊貴妃にこの地で縊死を命じた。

［十四］長恨歌：八〇六年、白居易（楽天）作の長編百二十句の七言詩。玄宗と楊貴妃を漢武帝と李夫人になぞらえ、その悲恋を描いた。「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝 - 天にあっては願わくは比翼の鳥となり、地にあっては願わくは連理の枝とならん」の句は有名。『白氏文集』などに諷喩詩、閑適詩を多く残す。

［十五］扶風縣：現在の陝西省宝鶏市下の県。

［十六］五丈原　諸葛武侯の祠：二三四年、長安攻撃を目指した諸葛亮の蜀軍と司馬懿の魏軍が五丈原で百日に亘って対峙した。しかし諸葛亮は病死し、蜀軍は撤退。魏軍は追撃を試みたが、蜀軍が反撃したため、司馬懿は軍を撤退させた。現在、五丈原諸葛亮廟博物館となる。

［十七］岐山：陝西省鳳翔県の北東にある山。南麓は周室始祖の地とされる。

［十八］秦嶺：甘粛、陝西の南部に東西に連なる山嶺。標高二千～三千米の山脈、最高峰は太白山の三七六七米。

［十九］大散關：陝西宝鶏市西南の大散嶺に位置する。

［二十］函山塔之澤宮の下：「函山」、「函嶺」とも。箱根山の塔ノ澤、宮の下。箱根旧道の石畳の険路を言う。

[二十一] 馬道驛　「蕭何が韓信を追踪せる古跡なり」：陝西留壩県馬道鎮。前二〇六年、劉邦が漢帝となり、蕭何は丞相に任命される。項羽の部下であった韓信は、劉邦に召し抱えられるも、信頼が得られず去ろうとする。蕭何は韓信を引き留めるためこれを追い説得し、その後漢帝の大将軍に抜擢された故事。

[二十二] 雞頭關：陝西漢中の西北の関、関に鶏頭状の大石があることからその名がついた。

[二十三] 五丁關：陝西漢中市強県に位置する。金牛峡桟道の要害。

[二十四] 廟子台　留侯の廟：秦末、劉邦の智将張良を祀る廟。張良は韓信、蕭何と並び「漢初三傑」と称される。司馬遷『留侯世家』は『史記』に収められる張良の伝記。

[二十六] 沔縣（べんけん）：現陝西漢中市強県の旧称。

[二十七] 建興年間　節度嚴武：嚴武（七二六～七六五年）は唐中期の大臣、蜀節度使（藩部を治める軍職名）。「建興」の年号は嚴武生存中には存在しない。「建興」は三国時代蜀の年号（二二三～二三七年）。

[二十八] 道光年間：清朝道光帝の年号（一八二一～一八五〇年）。

[二十九] 龍硐背：「龍洞背」は「川北第一洞」と称される洞窟。主洞窟は高さ約六〇米、第一洞窟から第二洞窟の間に「龍背」と呼ばれる洞があり、長さ百米、高さ数十米。四川朝天地質公園として公開。

[三十] 朝天驛：現在の四川省広元市朝天鎮。唐貞観年間に宿場、官驛として整備される。七五六年安史の乱により長安を逃れた玄宗を迎えたことから名づけられた。入蜀の桟道が遺跡として残る。

[三十一] 馬王廟：「馬王爺」を祀る廟。「馬神」とも呼ばれる道教民間信仰の神。

[三十二] 米點：水墨山水画の技法。米芾に由来す。

[三十三] 元章：米芾（字元章）、宋代の書家、画家。

[三十四] 劍閣：四川省劍閣県にある古代関所、天然の要害。劍州は唐代に置かれた「州」。

[三十五] 一夫門に當れば萬卒敢て開く莫きもの：一人の兵士が守れば、一万の兵でさえ攻め落とせない要害の関の意。『箱根八里』（明治三十四年　作詞：鳥居忱、作曲：滝廉太郎）の歌詞にあり。

[三十六] 送險亭：劍閣を過ぎ桟道の難所を越えた地にある亭。

[三十七] 石峽關は西秦第一關にして蜀道に入るの門戸たり：川陝境界の「西秦第一関」と称される棋盤関（七盤関とも呼ばれる）のことか。劍門と並ぶ要害の地。「石峽關」不詳。「石牛道」のことか。「石牛道」は陝西省沔県から四川省劍閣に至る蜀の桟道で、長安と成都を結ぶ交通上の難所。

[三十八] 「小心移步」：足元注意の意。

錦州より新都縣を經て成都府に出づ。蜀中歴代の首府、幾たびか劫火（ごうか）を歴て、古物探窮に於て稍失望せりと雖も、尚ほ明末清初更迭の狀態を窺測（きそく）すべきものあり。昭烈の祠堂[一]あり。其の構内には杜甫の浣花草堂[二]あり。附近には杜詩に「丞知祠堂何處尋。錦官城外柏森々」[三]と詠じて、今尚柏樹森々たる武侯廟[四]あり。觸緒傷心、轉た詩腸を破らしむ[五]。

【註】

[一] 昭烈の祠堂：劉備（昭烈帝）の陵墓。

[二] 杜甫の浣花草堂：安史の乱により成都に逃れた杜甫が四年居住した茅葺の庵、現在は杜甫草堂博物館。

[三] 「丞知祠堂何處尋。錦官城外柏森々」：「知」は「相」の誤り。杜甫詩『蜀相』「丞

相祠堂何處尋，錦官城外柏森森」（大意諸葛亮の祠堂は何処にあるかたずねると、それは錦城外の柏の大木が茂るところにありと）。

［四］武侯廟：武侯祠、諸葛亮を祀る。

［五］觸緒傷心、轉た詩腸を破らしむ：悲しさに詩を作る情をいよいよかきたてさせられるの意。

揚子江に泛ぶ。夔州［一］を過ぐれば瞿塘關［二］、白帝城［三］の古趾あり。關の西は則ち灩澦堆［四］、巫山縣に通ず。此峽に三峽の險あり。所謂瞿塘峽、巫峽、黄牛峽［五］なり。江船は三枚板或は五枚板なり。元來揚子江の水は非常に增減あり。夏季より仲秋に亙りては、平水より增加すること二十丈以上に及べど、秋末には頗る乾涸す。

棧道中叭叭鳥［六］多し。烏鵲［七］は太だ稀なり。處々樹木に榜して知事の名を記せるを見る。木の迷子札とも云ふべし。路しるべには彌陀佛の石頭を用ゆ。亦奇なり。酒は麴を煮沸して雞卵を混入したるものあり。味、甘酒ともろみの間に在り。また豚肉を米粉に和して蒸したるを侑む。亦箸を下に足る。梨實往々高さ四寸五分幅三寸なるあり。價は一顆十文（一錢）のみ。

棧道中盜多し。旅人皆早起程に上り早やく宿す。余も大抵三時に起き結束程を趁ふ。而かも日暮に至らざれば宿せず。蓋し支那人が一日半程に當れり。之に就き一話あり。北棧に入りて行くこと數日。一日程を貪り險を越ゆ。余痔を發して驢を下り、獨り後れて進む。時に日已に暮れ驛店獨遠し。一天暗黑、四圍閬として聲なし［八］。路傍にあたりて火光三四を認む。螢火の如くして更に爛然。加ふるに天候十月に屬するを以てす。余訝りつつ經過す。後驛店に達し從者に聞くに及び、始めて其狼なりしを知り、覺えず股栗［九］せり。

棧中雨ふれば則ち深泥膝を沒す。以て行く可らず。强て達せんとするも轎夫行くを肯せず。ために驛舍に滯ること數々なり。驛馬の鈴のかけかたは依然として唐代の風を存せり。

蜀道中屢々亞剌比亞風の建築を見る。蓋し亞剌比亞風建築は源を支那に發し、亞剌比亞を經て、更に西班牙に移りしものなり。棧雲一片、概略此の如し。

【註】

［一］夔州（きしゅう）：唐代に置かれた州、明代に夔州府となる。現在の重慶市奉節県。

［二］瞿塘關（くとうかん）：長江三峽奉節県瞿塘峽山麓にある。夔門とも。古代より入蜀の要害の地。

［三］白帝城：瞿塘峽口北岸にあり、後漢初に築かれたとされる。李白詩『早發白帝城』。一〇〇六年三峽ダムにより島となった。

［四］灩澦堆（えんひんたい）：灩澦堆（えんよたい）の誤り。白帝城下瞿塘峽口にあった長さ三十米、幅二十米、高さ四十米の大岩、長江航運の障害になるため一九五八年爆破された。杜甫の五言律詩に『灩澦堆』あり。

［五］瞿塘峽（くとうきょう）、巫峽（ふきょう）、黄牛峽（こうぎゅうきょう）：長江三峽、瞿塘峽全長約八粁、巫峽約四十五粁、黄牛峽（西陵峽とも）約六十六粁。

［六］叭叭鳥（はっかちょう）：ムクドリ科の野鳥、「八哥鳥」と表記される。

［七］烏鵲（かささぎ）：スズメ目カラス科、別名カチガラス。

［八］閬（げき）として聲なし：静かなさま、人気のないさまを言う。

［九］股栗（こりつ）せり：恐ろしさに足が震えること。

『支那遊記』註解其の二：「江邊人河邊人」、『支那遊記』註解其の参：第二第三所感／開封より（消息）に続く